会津大学短期大学部研究年報第63号　pp.93～98（2006）

幼稚園4・5歳児の対人葛藤解決

利根川　智子

平成17年11月30日受付

【要旨】　子どもは集団生活を送る中で仲間関係を持ち、社会性の発達を促す。葛藤解決場面においては、子どもは自他の欲求・要求の違いを考慮し、自分の情動や行動を調節しなくてはならないため、友達との関係の持ち方を学ぶ良い機会となる。本研究においては、幼児期後期の葛藤場面の内容、葛藤解決方略、葛藤の結果について発達的差違を探索的に検討することを目的とした。４歳・５歳クラスの男・女児26名の自由遊び中に生じた葛藤場面について分析した結果、葛藤数は５歳児の方が多く、内容は物・場所の取り合いが多く、解決方略は拒否や禁止の意思表示をすることが５歳児よりも４歳児に多く、葛藤の結果として、４歳児は言い分を通すことが多かったが、５歳児では双方の言い分を調節するかうやむやに終わることが見出された。

目　的

子どもは集団生活を送る中で社会性の発達を促す。同年齢の友達と対等の関係をもち、その関係性の中で、自分と相手の差違、自分の主張を通すこと、自分の主張を抑制すること、良いことや悪いことなどを学ぶということは当然のように語られてきた。そして、集団生活の中で生じる葛藤場面では、相手の考え方や出方を探り、自分の情動や行動を調整しながら関わることが要求されるため、友達との関係を学ぶ良い機会であることも長く語られてきた。

子どもの葛藤場面については、２歳児は葛藤につながる可能性がある場面でも葛藤になりにくいこと（鈴木，2005）、３歳児は不快な働きかけが消失すれば葛藤的なやり取りも消えるが、４歳児以降では不快な働きかけが消失しても葛藤的なやり取りは展開、継続し、当事者同士の働きかけに付随する相互の意図の読みとりによる調整や仲直りをおこなうことが報告されている（広瀬・根ヶ山，2003）。

対人葛藤解決について、幼児が生活を送る場で、幼児がどのような対応をしており、どのように変化しているのかについて分析されたものはあまりない。そこで、本研究では、対人葛藤場面を「他者との関係において自己の欲求・要求・行動が阻害される場面」と定義し、４歳時点、５歳時点での葛藤場面について、どのような内容の葛藤が生じているのか、葛藤をどのように解決するのか（以下、葛藤解決方略）、葛藤の結果誰の言い分が通っているのか等について、年齢による差を探索的に分析することを目的とする。

方　法

協力者

幼稚園に通う４歳児クラスおよび５歳児クラスに所属する32人（女児16人・男児16人）であった。協力者は、全員同じ幼稚園に通っており、同じクラスに所属する子どもが含まれている。このうち、２年間連続して観察可能であった協力者は女児11人、男児15人、合計26人であった。４歳児クラス所属の幼児（以下、４歳児）の平均年齢は59ヶ月、５歳児クラス所属の幼児（以下、５歳児）の平均年齢は72ヶ月であった。分析は、この26人の観察中に生じた葛藤場面についておこなわれた。観察者は、筆者と幼児教育を専攻する学生であった。

実施期間

1997年９月８日から11月28日（４歳児クラス所属時点）、および1998年10月15日から11月17日（５歳児クラス所属時点）であった。

手続き

幼稚園の園庭および建物内における自由遊び場面で、幼児１人につき15分間の録画による観察が期間内に２回おこなわれた。合計30分の観察時間内に葛藤場面が生じた場合には、葛藤内容、葛藤解決方略、葛藤結果について、カテゴリーに従ってコーディングがおこなわれた。

コーディング

葛藤場面のカテゴリーは、Killen and Turiel（1991）を参考に作成した。

葛藤内容のカテゴリーは、「物・場所（玩具や遊具、遊ぶ場所の取り合いなど）」、「身体的攻撃(叩く、蹴るなど)」、「心理的攻撃（「バカ」などの悪口、言葉で責めるなど)」、「遊びの役割（一緒に遊んでいて、役割の理解がすれ違う、ままごとの役の取り合いなど)」、「秩序（集団生活を維持する上での秩序が守られないこと)」の５つであった。

葛藤解決方略のカテゴリーは、「情動表出（相手に悲しみ、驚きなどの表情をむける、「もう！」と一言で情動状態を表現するなど)」、「攻撃（相手に叩く・蹴るなどの行為をおこなう)」、「拒否・禁止（相手からの働きかけを拒否する、禁止するなど)」、「理由・代案（相手にどうしてそのような言動をするのか尋ねる、相手の要求に対して代案を提示する)」、「他者依存（教師や友達に解決をしてくれるように頼む)」、「逃避・回避（葛藤の場から逃げる、回避するなど)」の６つであった。

葛藤結果のカテゴリーは、「行為者の言い分（相手の言い分が通った)」、「被害者の言い分（本人の言い分が通った)」、「双方、うやむや（両方の主張が調節された、または、うやむやのまま次の活動に移行した)」の3 つであった。

結果と考察

(1) ４歳・５歳時点での葛藤場面数と内容

それぞれの年齢で、どのくらいの葛藤場面が生じたのか、また、その内容をTable 1に示す。

Table 1　葛藤場面数

	物・場所			身体的攻撃			心理的攻撃			遊びの役割			秩序			合計
	全体	男児	女児	全体	男児	女児	全体	男児	女児	全体	男児	女児	全体	男児	女児	
４歳	103**	68**	35	20**	14**	6	17**	9**	8	13	9	4	20	13	7	173
%	59.5	60.2	58.3	11.6	12.4	10.0	9.8	8.0	13.3	7.5	8.0	6.7	11.6	11.5	11.7	100.0
５歳	138**	88**	50	66**	51**	15	57**	29**	28	20	8	12	22	14	8	303
%	45.5	46.3	44.3	21.8	26.8	13.3	18.8	15.3	24.8	6.6	4.2	10.6	7.3	7.4	7.1	100.0
合計	241	156	85	86	68	21	74	38	36	33	17	16	42	27	15	476

＋$p<.1$，＊$p<.05$，＊＊$p<.01$

４歳児と５歳児の葛藤数や葛藤内容に差があるかどうかについて調べるため、全員の、また、男

児、女児の葛藤場面について、χ^2検定および残差分析をおこなった。

全体的に、物・場所を巡る葛藤は４歳児（59.5%）が５歳児（45.5%）よりも多く、身体的攻撃は５歳児（21.8%）の方が４歳児（11.6%）よりも多く、心理的攻撃も５歳児（18.8%）の方が４歳児（9.8%）よりも多かった（χ^2=18.8, df=1, p<.01）。

男児の葛藤場面では、物・場所を巡る葛藤は４歳児（60.2%）の方が５歳児（46.3%）よりも多く、身体的攻撃は５歳児（26.8%）の方が４歳児（12.4%）より多く、心理的攻撃も５歳児（15.3%）の方が４歳児（8.0%）よりも多かった（χ^2=15.7, df=4, p<.01）。女児では葛藤内容についての有意差は見られなかった。

葛藤内容のうち、多く生じるものは、はっきりわかる形でおこなわれることが多い。幼児期後期を通して、比較的わかりやすいような葛藤が起きやすいといえるのではないだろうか。

(2) ４歳・５歳時点での葛藤解決方略

それぞれの年齢で、どの解決方略がどのくらい用いられたかについて、Table 2に示す。

Table 2　４歳・５歳時点での葛藤解決方略

	情動表出			攻撃			拒否・禁止			理由・代案			他者依存			逃避・回避		
	全体	男児	女児	全体	男児	女児	全体	男児	女児	全体	男児	女児	全体	男児	女児	全体	男児	女児
４歳	48	35	13**	56	38	18	96**	65**	31**	88	58	30	11	8	3+	44	24	20
%	27.8	31.0	21.7	32.4	33.6	30.0	55.5	57.5	51.7	50.9	51.3	50.0	6.4	7.1	5.0	25.4	21.2	33.3
５歳	103	55	48**	88	54	34	91**	60**	31**	143	92	51	10	9	1+	72	32	40
%	34.0	29.0	42.5	29.0	28.4	30.1	30.1	31.8	27.4	47.2	48.4	45.1	3.3	4.7	0.9	23.8	16.8	35.4
合計	151	90	61	144	92	52	187	125	62	231	150	81	21	17	4	116	56	60

+p<.1, ＊p<.05, ＊＊p<.01

４歳児と５歳児に使用される葛藤解決方略に差があるかどうかを調べるため、全員の、そして男児、女児の葛藤場面についてχ^2検定および残差分析をおこなった。

全体的に、拒否・禁止方略の使用のみに差が見られ、４歳児（55.5%）の方が５歳児（30.1%）よりも多く使用していた（χ^2=29.6, df=1, p<.01）。

男児の葛藤場面においては、全体の傾向と同様、拒否・禁止方略のみに差が見られ、４歳児（57.5%）の方が５歳児（31.8%）よりも多く使用していた（χ^2=19.4, df=1, p<.01）。女児の葛藤場面においては、情動表出方略を５歳児（42.5%）の方が４歳児（21.7%）よりも多く使用し（χ^2=7.4, df=1, p<.01）、拒否・禁止方略を４歳児（51.7%）の方が５歳児（27.4%）よりも多く使用し（χ^2=10.0, df=1, p<.01）、他者依存方略も４歳児（5.0%）の方が５歳児（0.9%）よりも多く使用する傾向が見られた（χ^2=2.94, df=1, p<.1）。

不快な刺激を他者からもたらされた場合には、拒否をしたり禁止したりすることを相手に伝える

のがわかりやすい。４歳児が拒否・禁止方略を用いるのには、わかりやすさも関係しているのではないだろうか。他者依存方略により自分の欲求・要求をかなえる場合には、教師に頼るのが一番成功しやすいだろう。４歳時点では、男女とも拒否、禁止方略の使用が多いが、５歳児点では、相対的に少なくなっている。また、５歳女児において、葛藤場面における情動表出が増加していた。非言語的な応答は、相手に明確に伝わらない場合がある（姜，2003）。本研究の場合、情動表出のカテゴリーには、表情による表出と、怒りを表わす単語が含まれているが、この方略を用いても、言語的な応答よりは遙かに意図が伝わりにくく、葛藤解決に必ずしも役立たないかもしれない。そのような方略を５歳女児があえて選択するのは、葛藤解決に伴う様々な要因が絡んでいるのではないかと考えられる。

(3) ４歳・５歳時点での葛藤結果

それぞれの年齢における、葛藤の結果がどのような状態になったのかについて、Table 3に示す。

Table 3　４歳・５歳時点での葛藤結果

	行為者			被害者			双方・うやむや		
	全体	男児	女児	全体	男児	女児	全体	男児	女児
４歳	33	16	17	112	71	41**	28	26*	2**
%	19.1	14.2	28.3	64.7	62.8	68.3	16.2	23.0	3.3
５歳	72	35	37	189	135	54**	42	20*	22**
%	23.8	18.4	32.7	61.4	71.1	47.8	13.9	10.5	19.5
合計	105	51	54	301	206	95	70	46	24

＋p<.1，＊p<.05，＊＊p<.01

４歳児と５歳児の葛藤の結果に差があるかどうかを調べるため、全員の、そして男児、女児の葛藤場面における結果についてχ^2検定および残差分析をおこなった。

どの葛藤結果についても、全体としては有意差が見られなかった。

男児の葛藤結果では、双方・うやむやにのみ差がみられ、４歳児（23.0%）の方が５歳児（10.5%）よりも双方の主張を調整した、あるいはうやむやになったまま次の活動に移ることが多かった（χ^2=8.74，df=2，p<.05）。女児の葛藤結果では、４歳児（68.3%）の方が５歳児（47.8%）よりも被害者の言い分が通ることが多く、５歳児（19.5%）の方が４歳児（3.3%）よりも双方の主張が調整された、あるいはうやむやになったまま次の活動に移ることが多かった（χ^2=10.61，df=2，p<.01）。

女児の葛藤結果が双方の主張を調整する、あるいはうやむやに終わることは、情動表出を用いることと関連しているだろう。葛藤解決の際、年少児・年中児よりも年長児が、そして、女児は男児よりも他者感情を考慮する（千葉・藤岡，2004）ことから、女児は葛藤解決手段として情動表出を

用いることが効果的であると考え、どちらかの欲求・要求を通すことにはこだわらないのかもしれない。発達的に、４歳児の双方・うやむやに終わる葛藤結果の持つ意味と、５歳児の双方・うやむやに終わる葛藤結果の持つ意味は異なるだろう。

今後は、遊び仲間との関係性や文脈、子どもの持つ特性や背景等、より多角的に検討することが必要であろう。また、観察からでは、その子どもの内面はつかみきれない。従って、子どもがどのように考えながら葛藤解決をおこなっているのかについても明らかにする必要があるだろう。

引用・参考文献

千葉紀子・藤岡久美子　2004　幼児の対人葛藤場面における問題解決方略の発達的研究　日本発達心理学会第15回大会発表論文集，60

姜信善　2003　幼児の仲間に対するコミュニケーション・スキルと社会的行動特徴との関係　心理学研究，**73**，449-456.

Killen, M., and Turiel, E.　1991　Conflict resolution in preschool social interactions. *Early Education and Development*, **2**, 240-255

広瀬美和・根ヶ山光一　2003　子どものいざこざの調整・仲直り行動の発達（１．横断的研究）日本発達心理学会第14回大会発表論文集，254

鈴木敦子　2005　対人葛藤になりにくい２歳児のあらそい　日本発達心理学会第16回大会発表論文集，409

謝　辞

お忙しい中、調査にご協力いただきましたあかいとり幼稚園の園長先生、先生方、幼児の皆さん、どうもありがとうございました。